

# 平成29年度未来を創る女性懇話会

## 議 事 録

日 時：平成29年8月21日（月）午後3時30分開会

場 所：北海道庁本庁舎 3階 知事会議室

### 1. 開 会

○司会（小玉環境生活部長） ただいまより、平成29年度未来を創る女性懇話会を始めます。

私は、このテーブルで唯一の男子ですけれども、司会を務めます環境生活部長の小玉と申します。リラックスして、よろしくお願ひいたします。

### 2. 知事挨拶

○司会（小玉環境生活部長） まず、高橋知事より、冒頭にご挨拶をさせていただきたいと思ひます。

○高橋知事 それでは、改めまして、高橋でございます。

本日は、大変お忙しい中、このように道庁までお越しただひいて、まことにありがとうございます。

女性の時代と言われておりますし、北海道初の女性知事ということで、もう10年以上やらせていただひておりまして、そういう立場である私自身、全道を回らせていただひている中で、できる限り多くの方にお会いしようということで、女性ばかりに会うと逆差別と言われてしまひますが、それぞれの地域特性を生かしてさまざまな分野でご活躍いただひている女性の方々にお会いして、地域の魅力やご苦労などのお話を聞かせていただひくことも楽しみにしているところでございます。

そうした中で、今回が3回目という企画でございますが、平成27年度から、未来を創る女性懇話会ということで、それぞれの分野でご活躍されていられる方々に道庁にお集まりいただひて、自由にいろいろご議論いただひく場を設定させていただいております。

今回のテーマは、「多様な人材が共生し、連携し、個性を活かして活躍で



きる、北海道づくり」としたところでございます。

道内各地で地域資源を活用した6次化、あるいは、子育て支援、観光振興といったいろいろな場面で女性の感性を生かした特徴ある活動が活性化しておりますが、この裾野をもっと広げていきたいと思っているところでございます。

また、来年は、北海道命名から150年という節目の年でもございますので、これに連動する形のさまざまな事業もできればなと思っておりますので、ぜひ、いろいろな話をお伺いできればと思います。

よろしく願いいたします。

### 3. 自己紹介

○司会（小玉環境生活部長） 本日は、お手元に配付している出席者名簿のとおり、さまざまなフィールドでご活躍されている皆様にご出席いただいております。まず初めに、皆様に簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。

詳しくは、自己紹介カードを資料4-4という形でお配りしていますが、まず、池本さんから簡単にご紹介をしていただければと思います。

○池本さん 皆さん、初めまして。



私は、積丹半島にある神恵内村で民宿のおかみをしております池本美紀と申します。

神恵内村は、人口が900人を切り、現在、北海道で2番目に小さな自治体です。

私は、地域を変えることができるのは、誰よりもそこに住む人だと思っています。日々、真剣に探し、考えていくのは、その土地に住む人の使命だと思っています。

しりべし女子会を初め、神恵内村魅力創造研究会や、しりべし未来ネットワークなどいろいろな会に所属し、その活動を通して、一つでも多くの気づきを得て、地域のプラスになるように活動しています。

今回は、このような貴重な場に呼んでいただき、お話をいただいたときから、とても楽しみにしてまいりました。

短い時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会（小玉環境生活部長） よろしく申し上げます。

次に、繁富さん、お願いします。

○繁富さん 初めまして。

N o r t h - W o m a n の繁富奈津子と申します。

私は、札幌を中心に、起業したい女性、起業後間もない女性のコミュニティーを2年前に立ち上げました。

現在は、夫と5歳の息子と3人で、札幌で暮らしています。

きょうは、息子が幼稚園の始園日ということで、懇話会への出席はちょっと難しいのかなと思っていたのですが、託児をご用意いただけただことで出席することができました。ありがとうございます。

このように、私は、子育てを経験して、子どもがいると女性は動き方が変わってしまう、環境が変わってしまうということをすごく実感しました。最近では、イクメンとか子育てに協力してくれるご主人がたくさんいるのですけれども、古い考え方の男性もいて、家事や子育ては女性がするもので、子どもは保育園ではなく、幼稚園で育てるものだという方に会った時などは、自分のやりたいこととの違和感をすごく感じました。今は、起業したい女性のためにセミナーを開催したり、交流会をしているのですけれども、新しく企業と行政と女性をおつなぎすることを目的としてイベントなども開催しています。一昨日になりますが、土曜日に、地下歩行空間で行政の皆様と女性の活動を発表するイベントを開催しまして、女性支援室の方には2年連続でことしも発表をしていただきまして、本当にお世話になっております。

本日は楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願ひいたします。

○司会（小玉環境生活部長） ありがとうございます。

次に、曾我部さん、お願いします。

○曾我部さん 私は、滝川の江部乙から、まちづくりコミュニティ行動隊女子部の代表として来させていただきましたが、ふだんは主人と2人で農家をやっています。

本来なら、今の時期は、そばの刈り取りの時期ですが、ちょっと時期がずれていまして、まだ忙しいところには入っていないので、主人も、こういう場があったらどんどん出ていくというか、暗黙の了解があるので、私は、農作業を3分の1やって、3分の2は自分のやりたいことをやらせていただいています。

まちを何とか活性化したいということで、江部乙まちづくりコミュニティ行動隊が平成26年4月に発足しました。最初のころは男性が中心で動いていたのですけれども、男性が重たいというか、怖がってというか、動いてくれなくて、それではということで、有志8人の女子が立ち上がり、行動隊の中で女子部をつくりました。動くには拠点が必要だということで物件も探したのですけれども、やっぱり、家賃とかいろいろな資本がかかるということで、なかなか踏み切ることができずにいました。そんな時、滝川にある國學院大學北海道短期大学部の学生さんがJRの駅舎を地域の活性化のためにということでちょうど清掃活動をしてくれていたのです。では、そこを使おうということになりました。現在は無人駅ですが、月に1回、第2日曜日に女子部で駅カフェを開催させていただいています。國學院生をはじめ、若い世代も取り込んで活動しています。

その中で、ことし3月から、「認知症カフェ」を同時開催しました。利用者は乳幼児か



ら高齢者まで幅広い世代の方で、毎回60人から70人ぐらいの方に利用していただいています。

すごく緊張して、自分で何を言っているのかわからないのですが、皆さんに会えるのを楽しみにしていました。

そんな感じで農家をやりながら、子育てをしながら、こういうこともできるのだということアピールしたいと思ってきました。

よろしくをお願いします。

○司会（小玉環境生活部長） ありがとうございます。

では、新田のんのさん、お願いします。

○新田さん 北翔大学3年、日本障害者スキー連盟所属の新田ののんと申します。よろしくお願ひいたします。



私は、小学校3年生から車椅子マラソンを始めたのですけれども、初めは普通の車椅子でショートレースに参加していました。中学校3年生から、レース用のレーサーという車椅子に乗ってレースに参加させていただいているのですけれども、今週の日曜日に、はまなす車いすマラソンを北海道マラソンと合同開催させていただくので、そちらに参加させていただく予定です。

○高橋知事 私がスターターをやります。

○新田さん また、おととしから、クロスカントリーも始めました。シットスキーという座って滑るスキーがあるのですが、去年、初めて海外に行かせていただきまして、初めてフィンランドでクラス分けを受けたりしました。今、来年3月開催の平昌パラリンピックの選考に向けて頑張っている最中です。

子どもたちがスポーツを始めたりしたくても、器具がなかったりということがあるので、そういう体験会などができるように今後も頑張っていきたいと思っています。

本日は、このような場に呼んでいただき、本当にありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

○高橋知事 まだ独身ですよ。

○新田さん はい。

○司会（小玉環境生活部長） まだ若いですね。

○高橋知事 失礼しました。

○司会（小玉環境生活部長） 八十川さん、お願いします。

○八十川さん うらかわエマオ診療所の児童精神科と精神科の医師の八十川と申します。

内科医の夫と一緒にエマオ診療所と、からし種という障がい児の通所施設を、これは放課後等デイサービスの分類になりますが、おととしの平成27年5月に開業しました。

日高管内で児童精神科の常勤医は私1人で、苫小牧から往復5時間ぐらいかけて来られ

る方もいます。日高管内では割と多くの方がいらしています。

ももとは浜松医大の出身で、浜松で小児科を1年やって、その後、大人の精神科を8年やっていて、その中で、浦河べてるの家の活動がおもしろいと思い、2011年に移住してきました。

そうしたら、メンバーさん同士のお子さんにボランティアでかかわるようになって、すごくおもしろくなって、この子たちが毎日通える場が欲しいなと思いました。自分自身も、最初は小児科だったのですが、児童精神科をもう一回勉強して専門的にやりたいと思ひまして、一度、浜松に戻って勉強して、こちらに戻ってきて開業しました。



自己紹介の題名のところの「『この地域に生まれて不幸』ではなく、『この地域に生まれてよかった!』」と思っほしいというのは、今まで、児童精神科の常勤医がいなくて、札幌医大から非常勤の先生が2カ月に1回、浦河日赤に来てくれるのですが、とっさのときにはかかれないので、往復7時間かけて札幌まで児童精神科を受診している人たちも結構いました。

5分診療でフィットするような医療が受けられなかったり、薬が合わなくて何カ月も待たなければいけない子たちがすごくたくさんいた地域でした。

からし種ができるまでは、母子同時で町の放課後等デイサービスはあるのですが、民間の預かり型の放課後等デイサービスがなかったので、障がい児を持っているお母さんが、夏休み中に2時間だけでも時間が欲しいと思っても、預かってくれるところがなくて、学校の先生に泣く泣くボランティアをお願いして預けていくとか、そういう地域だったので。

障がいのある子とその子に合った医療とか、教育とか、福祉を受けるのがすごく難しい地域だったので、そうではなくて、日高に生まれてよかったと思ってもらえるように、微力ですが、やっていけたらなと思っています。

子育てしながら、夫婦で開業医をするのは結構大変で、5時45分にどちらかが保育所のお迎えに行かなくてはいけないので、きょうは夫が行ってくれるのですが、急患が入ったり、緊急でとか、毎日ばたばたしています。

しかし、子育てをしないとわからないこともすごくたくさんあるので、やっぱり、子どもの応援だけではなく、お母さん方の応援という意味でも、自分が子育て経験をしたり、実際に大変な思いもしているということは本当に恵みだと思っています。

お招きいただいて、とても光栄です。よろしくお願ひします。

○司会（小玉環境生活部長） ありがとうございます。

懇話会に入る前に、お菓子とチーズのご説明をさせてください。

私ども女性支援室で、北の女性からのメッセージという活動事例集をつくっているのですが、それでもご紹介させていただいた黒松内町の西村さんがおつくりになった焼き菓子を3種類、道産小麦を使ったパウンドケーキとクーヘン、黒松内町と真狩村産のそば粉を使ったクッキーでございます。また、チーズは、道産の牛乳を使ったナチュラルチーズのセミハードと白カビタイプの2種類でございます。お茶は、同じくこのメッセージでもご紹介していますが、洞爺湖町の佐々木ファームで無農薬、無肥料の自然栽培黒豆を使用した黒豆茶でございます。



皆様、お召し上がりください。

それから、繁富さんから皆さんへのお土産をご紹介いただけますか。

○繁富さん 本日、皆さんのテーブルに置かせていただいたものは、私のNorth-W



omanという団体のメンバーで、書家の檜山さんという方がいらっしゃいまして、当別町で無農薬と、農薬をできるだけ減らして育てたお米をつくられて、それに奥様が感謝とか自然栽培米という文字を書いて売り出した商品です。

そもそもこの商品は、檜山さんがNorth-Womanに来ていただいたことがきっかけで、新

しく開発し売り出したものであります。

そのご紹介をさせていただきたいと思って、その檜山さんという女性にお願いしたところ、皆さんへのプレゼントということでご用意していただきました。どうぞ召し上がってください。

○高橋知事 ありがとうございます。

#### 4. 意見交換

懇話会テーマ：多様な人材が、共生し、連携し、個性を活かして活躍できる、北海道づくり

○司会（小玉環境生活部長） それでは、テーマに基づき意見交換を始めます。

今回のテーマは、「多様な人材が共生し、連携し、個性を活かして活躍できる、北海道づくり」でございます。

皆様には、事前に懇談の話題としまして、この三つの柱についてお知らせしております。

一つ目の柱は、その現状及び事例などにつきまして、二つ目は、一歩踏み込んで、道内での状況などについて、そして最後に、道では昨年「その先の、道へ。北海道」という新たなキャッチフレーズを設けております。それで、皆様自身の「その先の、道」につ

いての考え、思いなどについてご発言いただこうと思っております。

それでは、早速、懇談に入らせていただきます。

話題1の活動の現状や事例等についてですが、まずは、北海道の基幹産業である農業について、近年、農業女子が多く分野で活躍されて大変心強いと感じておられる曾我部さんから、農業分野での人材の活躍についてご発言をお願いしたいと思います。

○曾我部さん ここ何年かで、農業女子といって女性の方がメディアに出ることがすごく多くなったと思うのですが、それはやっぱりごく一部なのです。はっきり言うと、私たちのところはまだまだ男性社会であって、夫が大きな機械に乗り、奥さんはお手伝いという形が主です。しかし、今、滝川でも、6次産業というか、自分でつくった野菜を加工して販売するという女性の方たちが少しずつ出てきているのです。すごく頼もしくて、私もJ Aの滝川女性部で支部長をやらせていただいているのですが、そこでは、自分たちでつくった大豆を加工して、おみそをつくっているのです。それは、たくさんところで販売しているわけではなく、滝川の道の駅と、Aコープという地域だけの限定ですけれども、そこで販売しています。

無駄なものというか、余計なものを使っていません。大豆は、変な農薬を使わず、自分の目で確かめてできた作物なのです。麴は自分でつくったお米から作っています。それでおみそをつくっているものですから、すごく身体にもいいし、子どもたちのアレルギーにも大丈夫です。

そんな風に自信を持って売り出せるものが本当にたくさん出てきているのです。

道外から町内にお嫁に来て、自分のところに加工室をつくって、滝川は菜の花が有名ですが、その菜の花を使ってふりかけをつくったり、サツマイモは道内ではなかなかできないのですが、滝川でサツマイモをつくって、他の方とコラボをして、サツマイモが入ったアップルパイをつくってみたり、本当に若い人たちが一生懸命に頑張っているのを、指をくわえて見ている私たちが何か情けないなと思いながら、今に至っています。

○高橋知事 うらやましいなと思いつつも、先ほどおっしゃった駅舎を使ってのカフェとか、コミュニティ行動隊女子部8人の有志、これは有女（ゆうじょ）ですね。いろいろな議論をしながら、自分たちもこういうのをやろうということをやっているのでしょう。

○曾我部さん はい。でも、それは農業関係ではないと言ったら変ですけども、本来なら、農業のほうで、6次産業とか、お米をつくっているのだから、お米で何とかしようとなればいいのですが、それがなかなかできないのです。

そういうふうに思っているうちに、地域の若者がだんだん減ってきて、高齢者が多くなってきました。ただ、そういう方々が集う場所がないのです。介護施設や老人ホームはあ



るのですけれども、コミュニティというか、お友達に会いに行ったり、ただ友達とお茶を飲みながらお話をしたりというところは、バスで30分かけて行かなければならないとか、限定されてしまうのです。近くに徒歩でも自転車でも来られる場所がどこかないだろうかねと言っている私たちが集まって話すところもなかったのです。

ところが、先ほども言ったように、地方の学生さんが江部乙を見て、活性化させたい、元気にしたいという声、外からの刺激があったのです。外からの人たちにそう思われているのに、地元にいる自分たちがなぜ何もしないでいるのだろうということで、何かしようということでカフェをつくったのです。

JRさんもすごく喜んでくれて、場所もどんどん使ってくださいということで提供いただいて、2年前まではとても古いJRの駅舎だったのですが、私たちの活動が認められたのか、刺激があったのかわかりませんが、リニューアルをしてくれたのです。とてもきれいな駅舎になって、今、みんなも喜んで利用してもらっています。

みんなが楽しそうに和気あいあいと話している姿を見ているのがとても楽しくて、農作業で忙しいのですが、そのときだけはちょっとさぼって、みんなの顔を見に行ったりしています。

○司会（小玉環境生活部長） それでは、ほかの方々の事例や活動状況もお伺いしたいの



ですが、池本さんも、人口の少ない地域でご苦労もあろうかと思いますが、逆に外とのおつき合いもいろいろあると思います。その辺を交えてお話しいただけますか。

○池本さん 私は、神恵内村で生まれ育ち、高校も仕事先も実家から通ったので、一度も村から出たことがないのですが、5年前に神恵内村魅力創造研究会を立ち上げました。

今、私の同級生が会長をしているのですが、彼が「フェイスブックというものがあって、ただみたいなのだよ、ただだったら自分たちでもできるのではないかな」と言って、今まで村に育ててもらった私たちがこれから村に何か恩返しできないかという視点で、何かやってみないかと言われました。

神恵内魅力創造研究会は、最初は6人で立ち上げました。私はずっと村の中にいた人間ですけれども、彼らは高校とか大学で、一度神恵内から離れて、また戻ってきたときに、たった数年でも、コンビニもなければ本当に何も無い、どんどん疲弊していく村の現状を目の当たりにし思ったのかもしれない。自分たちが結婚して、今、子どももいる中で、今度はこの子たちがどうやって村の中で暮らしていくのかなど。それは、私は気づかなかった視点なのですが、一度、村の外に出た同級生たちが戻ってきて村を見て感じたこと、それがきっかけでできた会です。

子どもの頃のにぎわいをもう一度ということで、二十数年途絶えていた神恵内音頭とい

う神恵内の盆踊りを復活させました。ようこそ、皆さん、神恵内へいらっしゃいませみたいな感じの踊りと、音頭の音源もあるということで、子どものころに自分たちが参加していた盆踊りを復活させました。一昨日、その盆踊りをやりまして、5年目が終わったのですけれども、初めて晴れの盆踊りになりました。今までは、雨が降っても、村長とかがずっとやぐらの上で太鼓をたたいてくれたり、村の人も待ち望んでいたというか、そういうことをやってくれる人もいないので、商工会だけとか、漁業青年部だけとか、各団体だけでは、人口900人の村では本当に何もできないです。そういうことは関係なく、役場の人とか、私たち自営業の者とか、村の学校に勤める先生とか、介護福祉士とか、さまざまな人たちが、本当に神恵内をもう一度、と思っている人たちでできている会なので、いろいろな職種の人もあるし、年齢もさまざまですけれども、そういう人たちが魅力創造研究会を維持しております。



神恵内に来る人というのは、神恵内だけに来るのではなくて、後志の余市に寄ってきたり、神威岬に寄ってきたり、結局、周遊して来られます。そして、神恵内のキャンプ場に泊まったり、うちの宿に泊まってもらったりして、帰りはどこに寄って帰るのですかと聞いたら、ニセコのほうに寄って帰るとか、赤井川の道の駅に寄って帰るといった話で、やっぱり

神恵内だけが頑張っても駄目だなと思ひまして、広く後志全体を考えて、周遊してくるのであれば、各町村にいるキーとなる人たちとつながりたいと思ったのです。

それをつくった会がしりべし女子会です。

次はどここの地域に行くという話を聞いたら、じゃあ、こういうところがあるから行ってごらんと自信を持ってお客様にお勧めできる、そういうキーとなる女子でありたいという人が集まったのが、しりべし女子会です。

私は自営業だからこれだけしかやりませんではなくて、それは村に住んでいるみんなが同じ考えですけれども、漁師なので村のそういうことはやりませんとかではなくて、村をどうにかしたいのだったら、何が一番大切なことかということ、自分の持っているプライドは全部ゼロにして、みんなで考えて進めていくという感じで、魅力創造研究会を基盤として、次にしりべし女子会で後志とつながっています。

しりべし未来ネットワークというものもあるのですね。後志の中にある農業、漁業、建築士会とか、自営業、商工、JCとかいろいろな人たちが入っている会があるのですけれども、全部の会をうまく使ってという言い方は悪いですが、それで神恵内村を皆さんにもっと知ってもらって、未来の自分たちの子どものために何とか維持していきたいと思っています。

○高橋知事 道南の松前町でマグロ女子会をやっている杉本さんとお話をされていて、彼女たちの地域づくりの中でも一つ原則を決めていて、口を出す人、すなわち、こういうのをやってみたらいいよねという意見を言う人は、意見を言うだけではなくて自分がやるということをやっていないと、こういう地域活性化を進めていく会というのは、そのうち、言いたい放題のお茶会になって、地域活性化に結びつかないという話を聞いています。そちらはどうなのですか。

○池本さん 私たちは、北陸新幹線が通ったときに、L a d y K a g a（レディー・カガ）という加賀の温泉街の人たちをすごいなと思っていて、その次に、マグ女の杉本さんに「おかみさんつながり」で知り合いました。神恵内村はJRが通っていないので、新幹線というより、私はマグ女の活動のほうに目がいていて、私は、マグ女の道南の代表の方と「おかみさんつながり」で知り合いだったのと、しりべし女子会の副会長であるニセコの人は青森県側の島康子さんという人と知り合いだったので、お互いにそういう話も聞きながら、しりべし女子会ができました。

多分、私たちも、口だけではなくて、みんながやりたいと言ったら絶対にやるという体



を動かすメンバーが集まっていると思います。9人しかいない中で、後志は20市町村あるので、無理にふやすことはないなと思っていて、いずれ新幹線が後志にも来ますけれども、それが一番大切なのではなくて、そこに行くまでとそこを越えてからが大切だと思っています。一応、新幹線を見据えてということはありますが、その前とその後が一番大切に思っています。

○司会（小玉環境生活部長） 新田さんは、お若いのに、多様な人材が活躍している産官学の人脈をおつくりになっていますが、これまでの活動の経過なども含めてご紹介いただければと思います。

○新田さん 先日も東区体育館で、障がい者スポーツふれあいフェスティバルというイベントがあったのですが、障がいを持っている方しか来ていなかったのです。親御さんなど保護者との交流はあったり、どういうスポーツがあるのかと気になって来てくださる学生さんはいるのですけれども、地域の方などにはなかなか来ていただけなかったのです。障がい者スポーツも、バスケやラグビーなどは、公式戦でなければ一般の方でも一緒にできるのです。また、地域の大会だったら一緒に出たりもできるので、そういった体験会もしてほしいなと思っています。

まだまだ私自身も、若いというか、教える立場ではないのですが、子どもたちがスポーツをやりたいなと思ってなかなかできない現状があります。

北海道、札幌は、雪がたくさんあるということが魅力だと思います。私も、クロスカン トリーを一昨年に初めてやってみて、すごく楽しいなと思いました。雪があると、車椅子

の方はなかなか自分で動けないのですが、スキーに乗ったら、本当に自分で動いていけるのですね。ただ右、左と行くだけでも、山の中を下っていくのもすごく楽しくて、そういった楽しみも知ってほしいと思います。

障がい者スポーツというのは、器具が大事なものになります。マラソンでも競技用のレーサーだったり、シットスキーという座るスキーなどが必要になってくるので、そういったものを体験するのであれば、やっぱり何台かは必要になってきてしまうのですが、そういったものもしっかり用意して、いろいろな選択肢を広めていけたらなと思います。



あとは、今、シットスキーの開発もさせていただいて、北海道のクピド・フェアさんというところや道庁の方にも本当にお世話になっております。また、北見工業大学の先生だったり、私は北翔大学に今年、入学したばかりですが、スキー部の先生にお手伝いさせていただいたりしています。今までお世話になっている医大の先生とか、本当にゼロ歳からお世話になっている方々からいろいろな意見をいただいて、今、やっと自分の体に合ったスキーで滑らせていただいているので、本当に感謝しているのですが、やっぱり、自分だけではなくて、やりたいなと思っている人たちの可能性を広げていけるような活動ができればなと思っています。

○高橋知事 競技用のシットスキーの開発について、私たち道庁職員も、クラウドファンディングで資金集めとか、産学官の連携の中での技術開発とか、いろいろお手伝いをさせていただいています。経済部の若い職員たちがとても喜んでやっていて、私も報告を受けておりますし、北翔大学さんも一生懸命にやっいらっしゃいます。障がい者スポーツを少しでも多くの方々に理解をしていただいて、一緒に楽しんでいただくために、いろいろな人たちが連携して、お金集めも含めてサポートしていくことはとても重要だと思うのです。

それから、冬季のオリパラを誘致しようとしている我々にとって、1972年にやったじゃないかと言われるけれども、あのときはオリンピックだけでした。今回は、オリンピックはもちろん楽しくやりたいけれども、むしろパラリンピックのほうに私どもはより重点を置いてやっていきたいと思っているのです。

そのためには、場所だけの提供ではおもしろくないので、選手の方々にも多く頑張ってくださいと。それは、ご本人のトレーニングも大変重要だけれども、我々が使う器具、機器などでお手伝いできる部分もしっかりやろうというふうに、我々も頑張っていきますので、一緒に連携してやっていきましょう。

○新田さん ありがとうございます。よろしくお願いします。

○司会（小玉環境生活部長） 一つ目の話題はこの辺で、次に移らせていただく中で、また皆さんの活動を教えていただきたいと思います。話題の二つ目としてご用意させていた

だいたのは、一步踏み込んで、道内の状況につきまして、北海道には多様な人材が個性を活かして活躍できるような土壌、環境が整っているのか、備わっているのかということについて、皆様方からご意見を伺いました。

まず、活躍できる土壌があるのだというふうにお答えいただいた繁富さんからご発言をいただければと思います。



○繁富さん 私は、ここの答えにはすごく悩みまして、土壌はあると思っているのですが、そこに気づいている方とか、活かし切れているという方は本当に少ないと感じています。

それと同時に、北海道だけではないと思うのですが、人や事業を育てるところがちょっと弱いと感じながら、今、活動しています。

実際に私がNorth-Womanを立ち上げたときに、男性や企業支援をしているプロの方たちからは、何をしたいかわからないとか、お金にならないからやめたほうがいいとか、どうせ続かないからということを言われ、今も言われているのですが、実際に起業したい女性からのニーズは高く、イベントやセミナーではたくさんの女性が参加してくれています。

2年前までは起業支援という資格も知識も全くなかった私が仲間をつくって、こういった場にお招きいただけるまでご縁をいただけるという人の温かさも北海道の一つの資源だと感じています。

先ほど紹介しました檜山さんも、趣味が書道だったのです。それで、何かを始めたいということでNorth-Womanに参加していただいて、もともとのきっかけは、North-Womanから参加した方へちょっとお米のプレゼントをしたいのだけれども、そこに一筆書いてほしいというところから始まったのがこのポケットライスだったのです。本当に目の前というか、灯台もと暗しというか、すぐそこにあるチャンスにもなかなか気づけていないという本当にもったいないことが北海道では起きているのだと感じています。

本日も、このような機会をいただけて、直接お会いしてお話しできるというのは本当にありがたいということで、19日にチ・カ・ホでイベントをしたのですが、今回は稚内と帯広から団体で参加して下さった方がいるのですが、宿泊費や交通費がかかってしまうということを考えると、なかなか遠方の方にはお声をかけづらいということがあります。

道庁では、全道で活躍されている女性を紹介する事業をされていますが、そうした地域で活躍なさっている女性の方々が集まり、交流や情報交換を行うような、そういった場をつくっていただけるというのは本当にありがたいと感じています。

こういった場がたくさんふえると、北海道がもっと元気になって、活躍できる女性もた

くさんふえると感じています。

○高橋知事 確かに、広大な北海道なので、47都道府県の中には、県庁所在地で会合があったら、県内のどこから行っても1時間か2時間もあれば行って帰れるというところがほとんどではないかと思うのですが、北海道は、例えば、根室とか稚内の方が札幌で会議があるという、交通代とか、宿泊代とか、浦河からでもそうですね。お疲れさまです。

○八十川さん ありがとうございます。

○高橋知事 そういうことを考えると若干のハンディはあると思うのですが、それはおいておいて、先ほど繁富さんは、北海道には多様な人材が活躍できる土壌があるとおっしゃられたけれども、それを十分活かしているかどうかと言われました。

それを活かすためには、コミュニケーションをしっかりと図って、一人の考えだけではできなくても、みんなの持っているノウハウ、知恵、思い、考えを出したらできる部分はあるような気もするのです。

○繁富さん 先ほど、しりべし女子会の活動をお聞きしたので、North-Womanの団体を連れてお邪魔しようかなと思っていますが、そういった地域との交流ができればいいなと思っています。

○高橋知事 (ポケットライズを見ながら) 「感謝」というのは、きれいですね。

○司会 (小玉環境生活部長) きれいですね。私どもも頼みたいですね。

○繁富さん ことしの秋にオープンする当別の道の駅にも置かせていただけることになりました。

○高橋知事 話が少しそれるかもしれませんが、普通、お米というのは、ここまで真空にしないですね。

○繁富さん はい。乾燥を防ぐために真空にしているそうです。

○高橋知事 このほうが品質がもつわけですか。

○繁富さん そうです。

○高橋知事 ありがとうございます。

私は、多分、9月の当別町の道の駅のオープンのときに行きます。

○繁富さん そうですか。檜山さんに伝えておきます。

○司会 (小玉環境生活部長) 関連しまして、八十川さんも道外から来ていただきまして、北海道に期待を持っていただけているのではないかと思うのですが、移住してきたときの視点も含めて、北海道の可能性についてご発言いただければと思います。

○八十川さん 私も、2枚目の多様な人材が個性を活かし、活躍できる土壌があるかという問いについては、「思う」「思わない」の2択だったので、すごく悩んで、最後までこの紙が埋まりませんでした。

静岡県で医療をしていて、北海道に移住してきて思うのは、家や家族に縛られない人が



割と多いのかなということ。そもそも北海道に移住してきた方たちが割と多い地域だと思うので、先祖代々の江戸時代から続いてきたこの家のとか、墓のとか、そういうのは割と少ない地域だと思います。

夫が浦河日赤に行って、入院したから家族を呼ぼうと思っても来ないというのはどういうことなのだろうと言っていました。北海道だと、親とか祖父母も大事だけれども、自分の生活も大事という感じが割と多いと思います。

あとは、女性だからという空気も割と薄い感じもしたのですけれども、反面、地域が広いので、社会資源とかも非常に、特に僻地だと難しいなと思います。浦河は、民間の学童はあるのですけれども、放課後児童クラブがないのです。ですから、夏休み中でも、昼ご飯は児童館で食べられなくて、1回帰ってこなくてははいけません。民間の学童に預ければいいのですけれども、結構お金もかかるので、うちは、神奈川から3週間、夏休みとか冬休みとか、長期休みは、私の父が泊まりで子守りに来てもらいます。でもやっぱり、子育てをしながら地域でやっていくのはすごく難しいと思っています。



浜松だと、家事支援のヘルパーも選べるぐらいたくさんあるのです。浜松市エンゼルヘルパー制度というものがあって、そもそも出産するときに、1年間、家事ヘルパーの補助金がつくのです。時間数は決められているのですけれども、1,680円使うとすると、そのうちの1,000円は浜松市のサポートで、自己負担が680円で済むという制度があるのです。私は最初、家事ヘルパーなんてと思いましたが、赤ちゃんがいるときに、週に2時間でもお風呂掃除をしてくれたら本当に助かるので、

そういう公的な制度が選べるぐらいいろいろあったのに対し、浦河だと、じじばばがいなくて本当に困るとか、子どもがとっさに病気になったときにお迎えから困るとか、すごくいろいろなことがあって、すごくたくさんの方に助けてもらいながら何とかやっているのですけれども、日々、自転車操業というか、どうするどうすると言いながらやっている状況です。

また、私たちはよそ者だったので、最初はちょっと警戒されていたというか、本当にこの地でやってくれるのかという感じは正直あったと思いますが、地元の人と何度も話をしたり、思いを伝えていったりする中で、わかったよ、じゃあ、やってみなと、非常に快く力を貸してくれる方がすごく多いと思いました。

そうすると、まちの応援団がどんどん増えていきました。浜松市で開業するとしたら、医者が開業するのは普通ですし、放課後等デイサービスは100くらいあったりして、別々という感じだと思うのですけれども、浦河では地域のいろいろな人たちがすごく応援してくれました。温かい雰囲気は魅力的で、新しいことを始めるとか連携するということも、

地域の人に応援してもらっているなという感じがします。

○高橋知事 確かに、北海道は、外から来た人に対して大変オープンマインドで、排除しないで、みんな一緒にやろうやという雰囲気がある社会だと思います。ただ、今の話で、浜松市よりも育児支援が遅れているのですね。

○司会（小玉環境生活部長） 浜松市はすごいですね。

○高橋知事 財政もいいのでしょうか。政令市でしたね。

○八十川さん そうです。あとは、やっぱり、ホンダとかヤマハとか産業が結構あるから、税収面はすごくいいと思います。

○高橋知事 そこは、浦河町の財政を考えると難しいだろうし、では、道が支援しろよなんて言われても、179市町村ありますからね。

そこは、オープンマインドな中で、みんなで助け合うということで、ぜひ楽しく生活していただければと思います。

からし種というのは、どういう思いで名前をつけられたのですか。

○八十川さん 私たちはクリスチャンなので、エマオ診療所のエマオも聖書からとっているのですが、からし種も聖書からとっています。

からしの種というのはすごく小さいのですが、まくと1万倍にもなって、大きく成長するというのが聖書にあります。私たちも、子どもに接しても、これが役に立つのかと思ったり、日々、種を地道に植えているような作業だと思うときもあるのです。でも、子どもたちが豊かに実を結んでほしいという気持ちがあって、名づけました。

○高橋知事 そうですか。お2人の思いがあらわれているということですね。

○司会（小玉環境生活部長） 曾我部さんも、そういう土壤があるとお答えいただいているのですが、そう感じておられる点などについてご発言いただきたいと思います。

○曾我部さん 思うか思わないかといったら、思うのほうは少しだけ比重があったので思うにしましたのですけれども、今、江部乙のまちだけを出してしまうと、すごく暗くなってしまふのです。

私は4人の子どもがいるのですけれども、長男が茨城に就職で行ってしまつて、夏に帰ってきたときに、やっぱり田舎がいいと言ったのです。

今まで一回も言ったことがなかったのに、地方に出て、自分の住んでいた場所がよく見えたというか、いいのだなと、ほっとするのだなと。

私も江部乙で育ったものですから、自分の住んでいるいいところがわからなかったのです。それで、息子に言われて、そうなのだ、江部乙はそんなにいいのだ、ほっとするのだと思いだしてから、子どもたちのために、ふるさとを大事にしてあげなければならないと考えたのです。ですから、池本さんが言ったように、やっぱり、外からの刺激ではなく、自分たちが何かを発



信していかなければならないのだ。それを子どもから教わりました。ですから、駅カフェを始めたきっかけは、それもまず一つあるのです。

江部乙も高齢化で、離農する方が本当に多いのです。先ほども皆さんとお話をしたのですが、リンゴ農家の方たちも、高齢化でやめてしまったり、寂しい話ばかりだったのですが、駅カフェを始めてから高齢者の方とか若い方たちの話を聞いていると、暗い話ばかりではなかったのです。あなたたちがこういうことをしてくれたから、みんながこういうふうにお話しできるようになったのよ、居場所ができたのよと、暗い話以上に明るい話が出てきているし、江部乙を何とかしようという人たちは、私たちだけではなく、いろいろな人がいるのだなと思いましたし、そのきっかけを私たちがつくってあげようという思いがあります。

ですから、思う半分、思わない半分というのは難しいのですが、あってほしいという思いが多くて、思うとしました。



○高橋知事 まず、4人もお子さんをありがとうございます。道知事の立場から御礼を申し上げます。

北海道は出生率が低いのです。札幌市はついに東京都を下回ってしまったのですが、社会増減という意味では、もちろん出ていく人のほうが多いのですけれども、少しずつ頑張って、Uターンはもちろん、IターンとかJターンですね。江

部乙を出て、また江部乙に戻る人も少しずつふえてきている実態があるので、そこは、まさに多様な人材が活躍できる土壌ありと思う方のほうがちょっと多いのかなと、希望的に思います。

○曾我部さん やっぱり、地元にお仕事をするところがないから出て行ってしまうのです。仕事があれば、多少給料は安くてもとどまると思うのです。けれども、やっぱり、なかなか仕事がないというのが大半です。

○高橋知事 一方で、今、リンゴ農家さんの離農というお話がありますから、農業に人を呼び込むというの、今、我々道庁も一生懸命にやらせていただいております。

○曾我部さん それは、個人的というか、私たちだけではなく、行政の方たちももうちょっと力を入れてやってほしいという思いがあります。

○高橋知事 お金も要るし、いろいろな生産活動をやるにしても、ノウハウも要るし、いろいろな相談をする人も要るし、単に気持ちだけでとれるわけではないですからね。

○曾我部さん そうですね。

○司会（小玉環境生活部長） 二者択一の質問に適していなかったと思いつつ、思わないというお答えもいただいております。逆に、思わないというところに一つの思いがあるの

かもしれないのですが、池本さん、どうでしょうか。

○池本さん 皆さんと同じで、すごく迷いながら、期待を込めて、思わないと書きました。

今朝早くに神恵内で男の子が1人生まれました。かといって900人は超えないのですけれども、一つの宝が今年は5人生まれる予定ですけれども、一応、途切れなく、毎年、誰かは生まれているような状態です。

人口が1,000人を切ったときから、ちょっと大丈夫かなと思いつつ、とうとう900人を切って、今は892人になりました。今、村の総合戦略では人口を1,000人に戻そうよと言っているのだけれども、実際に100人ふやせるかといったら、できないかもしれないけれども、村に住んでいて、生まれる一つの命は、本当に900人みんなで見守るかのような命です。その子が大きくなっても、うちの子たちもそうですけれども、あの子はどこの子だとか、本当に昔から伝わる田舎のような子育てというのが神恵内では実践されています。また、福利厚生も恵まれていて、子どもに対しての予防接種とか健診ももちろんですが、大人の私たちでも、人間ドックは無料とか、基本健診は500円とか700円ぐらいで受けられたりします。それは、村長が一人も死なせない村と言っているのですね。



○高橋知事 えらいですね。

○池本さん はい。早期発見、早期対策ということで、救急車が来るだけでも30分はかかってしまう地域なので、健康面は村長もすごく力を入れていて、本当に900分の1の一人一人に求められることが村ではとても大きいです。

でも、それに応えようと思っている私たちと、変な話、私たちはいいよねと諦める、私たちの親世代とかは、私たちがもがき苦しんでいるというか、もうちょっと村をどうにかというふうに思っている、もう私たちはいいのよね、そうやって求められてもという温度差も結構ありまして、そういうことも埋められないかと思っています。

ですから、私たちはやりたいことがいっぱいありますし、もう一歩行けばできるのではないということも人がいなくてなかなかできないとか、今、本当に単純な理由でできないことが村にはいっぱいあるように感じます。

○高橋知事 盆踊りは、人が集まったのですか。

○池本さん 盆踊りは、大体450人ぐらい集まります。

○高橋知事 村の半分ですか。

○池本さん 村の半分ぐらい来るような規模です。最初の1年目は200人ぐらい来て、次は300人ぐらい来て、去年は450人ぐらい来たのです。

小さい子たちは、盆踊りが村にない状態で育ったので、盆踊りとはこういうものかとい

うイメージで、きゃーきゃー走り回ったりしています。そして、昔の神恵内音頭を知っているお年寄りたちは、みずから浴衣を着てきてくれたのを見たときに、すごく感動して、昨日も踊っていました。村長もお孫さんその時期に合わせて帰省させたりするし、仮装をやったり、お餅まきをやったり、いろいろなことをやるのですが、盆踊りは村になじんでいます。1回なくなってしまうけれども、それだけは続けてもらいたいなという思いがあります。ちょうちんも、一気に買えないので、年々少しずつ買って行って広げていくような、そういう思いもみんなに伝わっているのではないかと思います。



○高橋知事 では、プロジェクトによっては、求心力があると。

○池本さん はい。集まってくるし、それに合わせて帰省する人もいるので、きっと、やり方次第でもっと村にというふうにはできると思うのですけれども、今、地域おこし協力隊も村に来てくれて、空き家をDIYしていています。去年、知事に一度見に来ていただきましたが、そこが完成したので、今度はそこに協力隊事務所を移転して、この春からそこでやっています。今、4人目の協力隊も決まっています、協力隊というより、一村民のように溶け込んで彼らも活動しているので、この間、事務所に行ったら、すごくいいお肉があって、向かいのおばさんがお昼に食べなさいと持ってきたと言っていて、すごいねという感じなのです。村に、そういう若い男の子たちがいたら、自分の子どものようにお昼ご飯を届けるお母さんたちというような人たちもいます。

ですから、もう一步、みんながやる気になってくれれば、何とかならないかなと、もがきながら思っています。

○司会（小玉環境生活部長） 高橋村長がよく来られて、また赤ちゃんが生まれたよという話を自慢げにおっしゃっていただくと、こちらも本当にほんわかしてきます。

小さくてもいろいろなことをやっているまちがあるのですが、何でそんなにやるのと聞いたら、邪魔する人がいないからと言うのです。文句を言う人がいないので、行動する人はどんどん前に出られるのです。変に大きくなると、邪魔する人もいて難しかったりすることがあります。

それでは、三つ目の話題に入らせていただきたいと思います。

昨年、北海道では、新たなキャッチフレーズとして「その先の、道へ。北海道」という言葉を決定しました。道民の方々、そして、北海道を訪れるの方々にとって、北海道にはさまざまな可能性が広がっていること、そして、北海道が未来や世界に積極的に進んでいこうという動きを感じていただきたい、そうした思いを込めております。

皆様にとりましての「その先の、道」につきましてご発言をいただきたいと思います。

それでは、新田さんから、「この先の、道」、今まさにチャレンジしようとしていると思いますが、お話しいただけますか。

○新田さん 障がい者スポーツは、若者がとても少ないのですが、私が小学校のときにも、そもそもスポーツを始める前に、実は、普通小学校に入るのすらちょっと難しかったのです。今は大分変わってきているのですけれども、本当にお母さんが闘ってくれて、普通小学校に入れたみたいな感じだったのです。



やっぱり、スポーツを始めるにしても、何をすればいいかわかりませんでした。今だったら、フェイスブックなど情報共有できる場がすごくあるとは思いますが、人伝いに聞かないとわからなかったり、病院にいても、スポーツは気になると思っている、できる環境がないというか、せっかくこういう情報の場があるのにしっかり伝わっていかないのはすごく残念だと思っています。ポスターなどで情報を伝えていきたいと思っています。

それから、先ほどもオリパラ招致の話をしていただいたのですが、パラリンピックで選手が来るとなると、交通機関はJRやバスなどを使うと思います。今、JRは、事前に連絡をすれば乗れるようにはなったのですが、スロープを出すのに人員が足りない、次の時間というふうに1本後になったりしてしまうのです。また、人員がないので、その駅におりるのは朝の9時から18時までと時間が制限されていたりするので、そうすると、多分、試合も難しいのではないのかと思うのです。

海外に出ても、時間が決まっていて、車椅子対応のバスが何時何分というふうに1日に何本も出ているのです。札幌市内とか北海道だと、事前に連絡をしないと、その対応のバスに乗せていただけなかったりする、そういうところの対応があればいいなと思います。

また、今、シットスキーもつくっていただいているのですが、シットスキー自体、曲げる技術がなかなかなかったりして、そこをどうするかというふうに考えてもらっている最中ではあるのですが、そういった技術も、ほかの県と共同でもいいので、北海道内でその技術をどんどん増やして行ってほしいとすごく思っています。

健常者も障がいのある方も一緒にスポーツができて、子どもたちもオリパラに向けて頑張っていけるような北海道になったらすごくうれしいと思っています。

○司会（小玉環境生活部長） ありがとうございます。

八十川さんは、全国あちこちをめぐられて、北海道を「その先の、道」に選んでいただいたと思いますが、期待や希望などをご発言いただければと思います。

○八十川さん 開業先を浜松にするか浦河にするか悩んだ末に、雪かきをする覚悟で浦河に移りました。そんなに降らないので、北海道初心者にはいいところだと思っています。

資料5-3だけではなくて5-1に載せていただいたことと連動するのですが、浦河ベ

てるの家という精神障がい分野では世界でも日本でも先駆けになるような、当事者が発信したり研究していくようなところで勉強させてもらって、エマオ診療所とからし種を立ち上げたのですけれども、そのときに当事者をスタッフとして採用しようということを決めました。

家庭に苦労があるというか、精神障がいの親を持つ人がスタッフになったのですが、虐待家庭の子どもたちの気持ちをよくわかってくれます。

あとは、不登校経験者も採用したのですけれども、同じことをほかのスタッフが言うのと、経験した人が言うのとでは、傷ついている子どもにとってニュアンスが違って、この人だったらわかってくれるという思いから心が開いていったりするのです、そういうことがすごく大事だと思っています。

反面、そういうスタッフを支える人員も必要で、全部がそういうスタッフだと大変ですが、その兼ね合いを見ながらやっています。



あとは、浦河ではべてるのソーシャルワーカーやメンバーが地元の小中学校とか高校などに招かれて授業することが結構多いのです。そうすると、感想ですごく多いのは、精神病の人たちは何をするかよくわからないと思っていたけれども、僕たちと同じなのだと思いましたという意見なのです。

日本は、先進国の中で人口比に対して精神科入院が一番多いです。私が研修医だった2002年のころでも、学会に行ったら、退院促進、地域連携ということを言われていました。それから15年ぐらいになるのですけれども、実際には厚労省が計画したほどは精神科の退院が進んでおらず、かけ声は勇ましくても、なかなか地域に出ていけないという現状があります。そして、その一番の原因は、地域に住んでいる我々が怖いと思うということだと思のです。何をするかわからないし、どう接したらいいかわからないし、だって事件になるたびに精神鑑定をしているでしょうという感じになると思のです。確かに、私も、全然知らない患者さんだったら怖いですが、浦河町の人口から言うと、顔の見える関係で、大体の患者さんたちがわかる状況ですから、ああ、あの人があればお腹すいているのかなとか、あの人は最近ぐあいが悪いからちょっと声をかけてくるかという感じの中でやれているという浦河のサイズのいいところがあると思います。

今、浦河日赤の精神科病棟が休床になっています。それは、精神医学が発達したというよりも、看護師不足とかいろいろな要因があって閉じざるを得なかったという現状があるのですけれども、その中で、三十何年という長期の入院をしていた人たちが、今、地域で生活しはじめて奇想天外なことが起こっています。

統合失調症というのは、100人に1人発症しますし、鬱の生涯有病率は10人に1人、認知症もどんどん高齢化してくると結構率が高いので、精神障害は他人ごとではなく、我々

も将来は精神科病棟に入るかもしれません。その中で一緒に生きていくというか、そういう弱さも含めて、例えばほかの人を勇気づけたり、苦勞している子どもたちにメッセージを出したりということがすごく大事だなと思っています。そういう人たちを隔離して、見えなかったこと、いなかったことにするのではなくて、小さいころから教育や地域活動の中で触れていくとか一緒に生きていくということはすごく大事だと思っています。

今、新田さんがされようとしているシットスキーの活動もそことすごく関連してくると思うし、曾我部さんの認知症カフェも、まさしくそういう取り組みではないかと思うのです。いろいろな人が一緒に生きていく、いろいろな人がともにいて、それでいいというところがもっと進んでいったらなと思っています。

また、虐待の人たちの支援もしていて、子どもの支援も大人の支援もしています。今、町が窓口になって虐待の情報をキャッチすると、精神障がいや知的障がいの親が結構挙がってくることが多いのですが、虐待をしたくてしているケースはほぼなくて、育て方がわからないとか、自分も愛されて育たなかったから、どういうふうに接したらいいのかわからないとか、いわゆる不適切養育みたいなことがすごく多いと思っています。

我々は、子育て支援を結構していて、べてるとか訪問看護ステーションとか、町のデイサービスとか、町教委とかいろいろな人たちと連携しています。精神障がいの人は、浦河ではグループホームがすごくたくさんあり、ご飯をつくる支援や、お掃除やグループミーティングの支援を受けられます。その支援があると、病棟ではなくて、地域で過ごせる人たちは結構いるのです。しかし、そういう精神のグループホームは、子どもがいると入れないのです。例えば、知的障がいの男女がいて、子どもが生まれると、その子どもは施設とかということも、北海道だけではなく、日本全国で割と多いのです。

完全にそうではなくて、子どもの加算はとれないけれども、置いてあげるよというところもあるのですけれども、そういうところばかりではありません。

母子寮は、母子だったら入れるのですけれども、男性がいたら入れなかったり、ファミリーのサポートというものがすごく難しい現状にあります。

浦河町でも共同住居という形で精神障がいの親が入っていて、子どもも仮支援を受けていたりすることはあるのですが、子どもの分の加算がついていなくて、べてるとしては、



ただ働きです。支援があつたら子どもが施設育ちになるのではなく、親元で育つことができることが結構多いので、そういうシステムづくりを提言していきたいなと思います。まだ具体的にどういう形だったらうまくいくのか、シェアハウス型だったらうまくいくのかとか、いろいろまだ模索中ですが、ぜひ、そういうところを行政の方にも手伝っていただいて、発信していけたらなと思ったりしています。

○高橋知事 べてるの家の存在については、日本国

内でも世界的にも先進的な精神障がいの方々が集う場であって、私が知ったのは知事になってからで、事前には知りませんでした。

仙台では、精神障がいだけでなく、いろいろな障がいの方々のシンポジウムがあって、そのときはパネリストで呼ばれました。浦河町からべてるの家に入所しておられる方も来られていました。おっしゃられるとおり、精神障がいの方というのは、普通に話していると、全く普通なのです。その彼女がたしか言っていたことで、時々、お迎えが来るのだと言っていたような気がします。

そうすると、自分も普通とは違うなという状況になります。精神障がいというのは、私も素人なので、余り無責任なことは言えないのですが、そういう障がいなのかなということを、そのときにご本人から話をお伺いして思った記憶があります。

身体障がいの新田さんも大変ご苦労があるけれども、そして、知的障がいの方々と比較において、精神障がいの方々が何かトラブルがあると、全国をめぐるようなニュースになって、危ないという状況になります。普通の人で、わからないときはわからないのだけれども、わかってしまうと一番接したがないのが精神障がいの方々かと思うのです。

十勝のほうで、精神障がい入院が長くなった方々を地域で一緒にサポートしながら暮らそうという運動をしておられる方々もいます。少なくとも、おられたのです。高齢化して、最近はどうなったかはわからないのですが、日本国内でも大変珍しい民間主導の試みだということを聞いたような気がします。

それは、先ほどの北海道民のオープンな姿勢ともつながるのですが、北海道の人というのは、よそ者とか、自分たちとちょっと違った人たちを幾らでも受け入れる度量の広さ



あります。そういう道民性だと思うので、ぜひ、浜松から移転してこられた八十川ご夫妻におかれても、浦河で長くご活躍いただきたいと思います。私が結論的に申し上げたかったのは、そこです。

行政のいろいろな政策提言みたいなことも、どこまでできるかということは当然あるのですけれども、ぜひ、いろいろと教えていただければと思います。

ありがとうございます。

○司会（小玉環境生活部長） 恐らく、行政の中にも横断的なご相談をせざるを得ない場面がたくさんあって、福祉だったり、医療だったり、教育だったりということで、素晴らしいパートナーがいらっしゃるのかなと勝手に思っております。

それでは、「その先の、道」というテーマで、ほかの3人にも聞きたいと思います。

今、行政のお話も出ました。先ほど、池本さんからも村長がすごく動いてくれるのだというお話がありました。行政にこうしてもらってうれしかったとか、助かったとか、連携してくれてよかったとか、JRさんは破格の連携をしてくれたのではないかといったお話も含めて、「その先の、道」への皆さんの期待をご発言いただければと思います。

○曾我部さん JRさんには本当に感謝していますが、最初、私たちが駅カフェを立ち上げるときに、行政には頼らないでおこうというふうに話を持っていったのです。行政に頼ると、お金の問題とか、報告書とか、煩わしいことが結構出てくるから、自分たちでやりたいことを思い切りやろうと。

行政が関わってくると、思い切りやりたいことができないのではないか、何か制限されるのではないかとということがあって、自分たちでやり始めたのです。

ところが、1年ぐらいたったときに、認知症カフェを開設しないかという話は、朝日新聞厚生文化事業団の方からお話があって、私たちの活動がとても変わっている。年齢も、小さい子どもから高齢の方、学生さんが入ったり、男性の方も女性の方もということで、そういうところで認知症カフェをつくったらどうだということで、厚生文化事業団の助成金を3年間いただきまして、それをもとに必要なものなどを準備させてもらったのです。



道庁に来てお話をさせてもらっているのに、行政を頼らないというのも何ですけれども、それこそ、箱物というか、JRの駅舎もそうですけれども、お金をかければいいというものではなくて、何もないというか、本当に古めかしくて、汚らしい駅舎だったのですけれども、それを使う第2日曜日の駅カフェのときだけは飾って、きれいにして、寒いからポータブルのストーブを持ち込んでというのも、全部自前で、最初の1年ぐらいはそれでやってきました。

それでもすごくやった充実感があって、みんなの反応もよくて、それを、それこそ行政の、市役所の方が聞きつけて、その事業団の助成金はいかがなものかということで話をいただいたのです。

ですから、すごく申しわけないのですけれども、行政を頼りにしないでこれだけ頑張れたなというのが結論です。

○高橋知事 すばらしいと思いますよ。

○司会（小玉環境生活部長） すばらしいと思います。ぜひ、お金はないと思うのですけれども……。

○高橋知事 前田市長も喜ぶと思います。

○曾我部さん そうですね。

○司会（小玉環境生活部長） 繁富さん、いかがでしょうか。

○繁富さん 私が事前に提出させていただいたものに、私の「その先の、道」は、北海道からもったいないを減らすお手伝いをすることですと書かせていただいたのですけれども、今考えると、すごい大胆発言をしたなと思っています。

ただ、これは、私一人ではできないことで、これに仲間や企業、行政の皆さんの力をかしていただいて、本当にもったいないと思う北海道の資源を何とか活用していったって、北海道を元気にしていきたいというのが今の一番の目標になっています。これからまたいろいろとお世話になりますが、よろしく願いいたします。

真っ先に行政の力をおかりしてということを考えています。



○司会（小玉環境生活部長） 逆に、力を貸していただきたいという思いがございます。

○繁富さん お願いいたします。

○司会（小玉環境生活部長） それでは、池本さん、お願いいたします。

○池本さん 今、神恵内村自体が域学連携を組んでいる北広島の星槎道都大学の学生さんとか、魅力創造研究会が連携を組んでいる北星学園大学の学生さんとか、ことしから、小樽商大の方たちも

神恵内といろいろな連携をとりたいと言ってくださいます。学生さんたちが夏休みに静かな空間で何かを製作したり、道都大学では美術学部がアートの製作をしたり、そういう感じでいろいろな方たちが村に入ってくるようになりました。

後志の中では、一番小さな漁村の神恵内村と一番小さな農村の赤井川村が連携を組んでいたりと、お互いのイベントを行ったり来たりするのですが、それとは別に、真狩村のスリッパ卓球の方たちと……。

○高橋知事 真狩にスリッパ卓球というものがあるんですね。

○司会（小玉環境生活部長） 有名なのですよ。

○池本さん はい。全日本大会を真狩でやっているのです。

そして、神恵内の人たちが5年ぐらいずっと優勝をかつさらっているのですが、それをきっかけに、お互いの地域が連携を組み、そういう人たちとの交流がふえることによって、神恵内にいる人は少ないかもしれないけれども、神恵内を知ってもらって、大学生の人たちでも、結婚して、子どもができて、大人になったら、ここに自分たちも来たことがあるのだと言って、また村に戻ってきてもらったり、そういう交流を深めていこうという考えが大きくあります。

しりべし女子会もそうですが、自分のところの地域だけではもうどうにもならない考えも、後志を大きく見て、連携して取り組んでいきたいと思っています。夢を膨らます可能性はまだまだあると思って、みんな諦めずに頑張っています。

○高橋知事 クリプトン・フューチャー・メディア社のバーチャル道民というものを ご存じですか。

○池本さん いえ、知らないです。

○司会（小玉環境生活部長） 初音ミクをプロデュースしたクリプトン・フューチャー・

メディアの伊藤さんが提唱されているバーチャル道民という考え方がありまして、それにあちこちの地域になっていただくとか。

○高橋知事　そうですね。北海道だと179の中で、自分はどれがいいかとネットを通じての情報を見ながら選んで、そこと交流をして、場合によっては、行こうということになるかもしれません。そういうプロジェクトをやっています。



後から皆さんにもお知らせします。それぞれの地域の発信にもなると思いますしね。

○司会（小玉環境生活部長）　スリッパ卓球が日本中にといいことがあるかもしれません。

○池本さん　真狩村では、真冬の2月の雪の多い羊蹄山麓でわざわざやるのです。それをめがけて本州からとかも来るのです。神恵内村からも行くのですが、それはすごいと思います。

熊本県の黒川温泉というところからも、そっちはスリッパ卓球が有名で、そちらから遠征して来たり、いろいろなことをやっているの、ちょいちょいと絡まっていけたらいいなと思っています。

○高橋知事　そうですね。

○司会（小玉環境生活部長）　まさにSNSで世界中にディープなつながりができやすくなりましたので、神恵内村にもいろいろな可能性があると思います。

先ほど、私は行政とぜひ連携してくださいと言いましたが、頼るときもあるし、頼られることもありまして、ぜひ助けていただきたいという場面があると私はすごく感じますので、これからもいい情報、おもしろい情報をお伝えいただければと思っています。

そろそろ予定の時間ですけれども、もう一言というお声はありませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○司会（小玉環境生活部長）　最後に、知事からお願いいたします。

○高橋知事　楽しかったです。私も含めて言いたい放題という感じでしたけれども、いただいたお話を踏まえて、これから政策に反映できるようなことはしっかりやらせていただきたいと思います。

これからも、それぞれの地域で、それぞれのお立場で、最大限力を尽くしていただくことを心からお願い申し上げます。

ありがとうございました。

## 5. 閉　　会

○司会（小玉環境生活部長）　それでは、これもちまして、本日の懇話会を終了いたします。

全道各地からご参集いただきましたことに、改めて御礼申し上げます。

本日の懇話会の模様は、道のホームページに公表させていただき、広く情報発信をさせていただきます。

この会は、今日で終わらず、これからもいろいろな情報を教えていただきたいと思います。

本日は、誠にありがとうございました。

以 上

